

〈原 著〉

コミュニケーション能力による看護大学生の 受け持ち患児に対する気分の変化

— コミュニケーションタイプを考慮した看護大学生への関わり方に関する考察 —

畠 知 華 子¹⁾ 山 中 真 弓¹⁾

Changes based on communication skills of nursing students in their mood towards child patients
— Consideration about the relation to a taking charge of affected nursing students
in consideration of a communication type —

Chikako Hata¹⁾ Mayumi Yamanaka¹⁾

1) 活水女子大学 看護学部

要 旨

本研究の目的は看護大学生のコミュニケーション・スキルタイプと小児看護学実習における患児受け持ち前後の気分の状態の関連を明らかにすることである。A大学看護学部3年生67名を対象に質問紙調査を行い、46名からデータを回収した（回収率68.7%）。コミュニケーション・スキル ENDCORE s の尺度を使用し、A大学看護大学生（以下：看護大学生）のコミュニケーション・スキルをタイプ別に分けた。多い順に『受動型』24名（52.17%）、『均整型』10名（21.74%）、『万能型』6名（13.04%）、『凡庸型』4名（8.70%）、『消極型』2名（4.35%）であり、『能動型』『回避型』『我執型』が該当する者はおらず、高スキルの看護大学生が多かった。特に『受動型』が多く、看護師を目指す看護大学生の傾向が示唆された。実習終了後の【爽快感】について、全体では得点が増加した（ $P = 0.030$ ）が、特に『万能型』である6名中5名のひとりひとりの看護大学生の得点をみたと、【爽快感】の得点は、低下していた。これは、『万能型』である看護大学生は患児や家族との関わり中で、小児看護の難しさを感じており、課題意識を持つことで【爽快感】が実習終了後に低下する傾向にあることがわかった。万能型の看護大学生の課題に対して、看護大学生が感じたことを言葉で表現する機会を作り、意味づけを導く必要性があると考えられる。

キーワード：看護大学生 コミュニケーション・スキル 臨地実習 小児 気分

I 緒言

1. 研究背景

小児看護学実習で看護大学生が困難を感じる原因のひとつに、子どもとのやりとりや親との関係が挙げられている¹⁾。学生は実習中、患児やその家族に対して、良好なコミュニケーションを取ろうとするが、それができない様々な要因と向き合いながら実習をしている²⁾。そのような中でも、子どもや親に対して積極的に関わることができ、満足した実習が出来る看護大学生も存在する³⁾。子どもや親に対して積極的に関わることができる

看護大学生はコミュニケーション・スキルが高いと推測する。

看護大学生は実習前の講義・演習で患児や家族との信頼関係を築くこと、患児の発達段階に合わせたコミュニケーションを取る必要性を学んでいる。しかし、携帯電話のメールなどによる人との交流の中で生活してきた学生は、言葉での訴えが少ない子どもを観察することや言葉以外で交流する力が弱い³⁾。そのような看護大学生のコミュニケーション・スキルが、どのようなタイプであるのか知ることで指導の示唆を得たいと考える。

先行研究では、看護師は検査・処置・治療中の“児の苦痛や嫌がっている様子”を見て、困難感やストレスを感じているが、コミュニケーション・スキルの解読力が高い看護師は、患児の苦痛や嫌がっている様子を冷静に解釈できるため、自身の困難感やストレスを軽減できると考えられている⁴⁾。看護大学生の小児看護学実習における困難感²⁾が指摘され、また他の領域別実習に比べ、最も看護大学生の困難感が強く、患児の反応の「解読」が出来ず、対応に戸惑い、「ネガティブ情動」も強い⁵⁾と述べられている。コミュニケーション・スキルが高い看護師が気分のコントロールができるという先行研究を考えると、看護大学生のコミュニケーション・スキルは、実習中の困難感から生じるであろう【不安感】や【抑うつ感】という気分に影響すると考える。看護大学生のコミュニケーション・スキルのタイプによって、気分にどのように影響しているか関連性を知ることで、意図的な実習指導ができると推測される。

以上のことから、本研究の目的は、看護大学生のコミュニケーション・スキルタイプと実習前後の気分との関連を把握することとする。

II. 研究方法

1. 研究対象

2015年度小児看護学実習生 67名

2. 調査期間

2015年10月26日～2016年3月4日

3. 研究デザイン

探索的記述研究

4. 研究方法

質問紙調査

5. 調査内容

1) 看護大学生の属性と背景：年齢、同居者の有無、兄弟の有無、子どもとの接触体験の機会、小児看護への興味、小児看護学の病棟実習への不安、事前学習について、患児とのコミュニケーションがよくなった理由・できなかった理由、患児を受け持ったことで感じたこと。

2) コミュニケーション・スキルの調査

コミュニケーション・スキル尺度 ENDCORE s (藤本・大坊, 2007)：24項目、「自己統制」「表

現力」「解読力」「自己主張」「他者受容」「関係調整」の6つの下位尺度で構成され、「あてはまる」～「あてはまらない」の7件法で採点し、得点が高いほどコミュニケーション・スキルが高いとする。ENDCORE sの各尺度の得点パターンをもとに、回答者を8種のタイプ、『消極型』『我執型』『凡庸型』『回避型』『万能型』『受動型』『均整型』『能動型』に分類できる。

高スキルの4タイプについて：すべてのコミュニケーション・スキルが高い『万能型』、表出系(表現力・自己主張)以外が高い『受動型』、言語的な能力と自己主張は高いものの自己統制が低い『均整型』、反応系である理解力と他者受容が高い『能動型』である。

低スキルの4タイプについて：自己統制が高く自己主張が低い『消極型』、自己主張だけ高く対人関係に重要な他者受容と関係調整が低い『我執型』、全てが全体的に下回るがいずれもある程度平均に近い『凡庸型』、全てが下回る『回避型』である⁶⁾。

3) 患児を受け持つ前後の気分の変化

気分調査票(坂野 1994)：40項目、【緊張と興奮】【爽快感】【疲労感】【抑うつ感】【不安感】の5因子で構成されている。採点方法は各因子「全く当てはまらない」～「非常に当てはまる」の4件法で採点し、合計得点の平均をみる。

6. データ収集方法

実習前のオリエンテーション終了時に2回分の質問紙を配布した。①病棟実習初日に学生の属性や背景とコミュニケーション尺度、気分調査票1回目(患児を受け持つ前)、②患児を受け持つ最終日の実習終了後に気分調査票2回目(患児を受け持った後)の気分について、質問紙を2回に分けて回収した。回収方法は、記入後に個人用の回収用封筒に厳封してもらい、研究者が設置した回収ボックスへ任意で投函とした。

7. 分析方法

統計的分析には統計ソフト SPSS Statistics23 を使用し、有意水準5%とする。対象者である看護学生の属性や背景について単純集計を行った。‘子どもとのコミュニケーション’と‘子どもと接触する機会’をクロス集計とした。コミュニケーショ

ン・スキル ENDCORE s の各尺度の得点パターンをもとに、得られたデータをタイプ別に分類し、尺度開発者からスーパービジョンを受けた。自由記載については内容をコード化し、類似性と相違点を検討し、カテゴリーを抽出した。分析の過程では小児看護学研究者および小児看護実践者と協議し、再検討や修正を行い、真実性と妥当性の確保に努めた。患児を受け持つ前後の気分の変化の差は、心理尺度であるため、ノンパラメトリック検定で行い対応ある 2 群を Mann-Whitney の U 検定で行った。

8. 倫理的配慮

看護大学生に文書及び口頭にて、研究の説明を実施した。説明は小児看護学実習の評価者でない同領域の研究担当者が説明を行った。小児看護学実習を行う 3 年生の各実習グループに質問紙を配付した。投函後は無記名で回答するため投函後の同意の撤回は不可能であることを説明した。研究者が設置した回収ボックスへ質問紙の投函をもって参加の同意を得た。データを処理するときには、個人が特定できないように匿名化した。(活水女子大学看護学部倫理審査承認番号 - 第 15-68 号)

III. 結果

コミュニケーション・スキルの下位尺度を「」コミュニケーション・スキルの 8 種のタイプを『』、気分調査票の気分を『』、看護大学生の自由記載の設問を『』、看護大学生の自由記載のカテゴリーを『』、看護大学生の自由記載を「斜体文字」で示した。

1. 研究対象者の背景

看護大学生 46 名よりデータを回収した (回収率 68.7%)。46 名の基本属性は表 1 のとおりである。

表 1 研究対象者の基本属性

		n=46	
項目	人数	%	
生活	家族と同居	38	82.6
	学生寮	5	10.9
	一人暮らし	3	6.5
兄弟の有無	あり	41	89.1
	なし	5	10.9
兄弟人数	1人	7	15.2
	2人	20	43.5
	3人	10	21.7
	4人	3	6.5
	5人	1	2.2

家族と同居している看護大学生が 38 名 (82.6%) であった。兄弟がいる看護大学生は、41 名 (89.1%) であった。

看護大学生の背景について表 2 のとおりである。子どもとのコミュニケーションがとても得意であると回答した看護大学生は 5 名 (10.9%)、得意 23 名 (50.0%)、苦手 17 名 (37.0%)、とても苦手が 1 名 (2.1%) であった。子どもと接触する機会が毎日かときどきは 10 名 (21.8%)、2、3 カ月に 1 回は 5 名 (10.9%)、半年に 1 回は 6 名 (13.0%)、ほとんどないは 25 名 (54.3%) であった。`子どもとのコミュニケーション`と `子どもと接触する機会`をクロス集計した結果、コミュニケーションの機会があると答えた看護大学生がコミュニケーションを得意だと答える傾向にあった ($P < 0.05$)。逆にコミュニケーションの機会がないと答えた看護大学生はコミュニケーションが苦手と感じていた ($P < 0.05$)。病棟実習前の不安があると回答した看護大学生は 12 名 (26.1%)、まあまああるは 21 名 (45.7%) であり、7 割の看護大学生に不安があった。

表 2 研究対象者の小児看護学実習前の背景

		n=46	
項目	人数	%	
子どもとのコミュニケーション	とても得意	5	10.9
	得意	23	50.0
	苦手	17	37.0
	とても苦手	1	2.1
子どもと接触する機会	毎日か時々	10	21.8
	2、3カ月に1回	5	10.9
	半年に1回	6	13.0
	ほとんどない	25	54.3
小児看護への興味	あ る	15	32.6
	まあまあある	17	37.0
	どちらでもない	12	26.1
	な い	2	4.3
小児看護学実習前の不安	あ る	12	26.1
	まあまあある	21	45.7
	どちらでもない	10	21.7
	な い	3	6.5
事前学習の自己評価	よくできた	5	10.9
	できた	36	78.3
	あまりできなかった	5	10.8
	できなかった	0	0.0

2. 看護大学生のコミュニケーション・スキルのタイプについて

コミュニケーション・スキル ENDCORE s の各尺度の得点パターンをもとに、藤本 4) の分析法を用いて回答者を 8 種のタイプに分類することができる。看護大学生のコミュニケーション・スキルタイプを一般の大学生 (藤本・大坊, 2007) と比較したものを図 1 に示した。看護大学生のコミュニケーション・スキルのタイプについて、最も多かったのは『受動型』24 名 (52.17%)、次いで『均整型』10 名 (21.74%)、『万能型』6 名 (13.04%)、『凡庸型』4 名 (8.70%)、『消極型』2 名 (4.35%) であった。『能動型』『回避型』『我執型』が該当する看護大学生はいなかった。

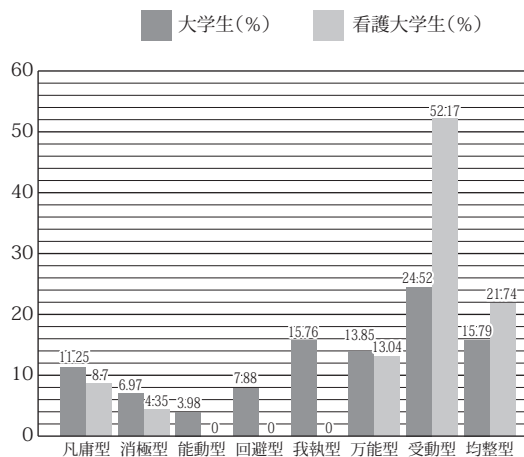


図 1 一般の大学生と看護大学生のコミュニケーション・スキルタイプ

3. 実習前に感じる実習に対する不安について

病棟実習前の不安について看護大学生 33 名の実習前の自由記載からカテゴリーの抽出を行った。その結果、42 のコード、12 のカテゴリーが抽出された。表 3 にコミュニケーション・スキルタイプ別に示した。カテゴリーは、【コミュニケーションそのものに対する不安】、【看護介入できるか不安】、【看護師に対する不安】、【技術に対する不安】、【子どもが苦手】、【子どもと接したことがない】、【子どもに対する不安】、【児と親と関係形成ができるか不安】、【児の安全が保持できるか不安】、【児の親に対する不安】、【小児の病態や疾患の理解が不得意】、【毎回不安】であった。

表 3 実習前に感じる実習に対する不安

	カテゴリー	件数
【受動型】 n=18	子どもと接したことがない	7
	子どもに対する不安	4
	子どもが苦手	2
	児の親に対する不安	2
	小児の病態や疾患の理解が不得意	1
	看護介入できるか不安	1
	毎回不安	1
【万能型】 n=10	子どもに対する不安	3
	児の親に対する不安	2
	子どもが苦手	1
	子どもと接したことがない	1
	コミュニケーションそのものに対する不安	1
	児の安全が保持できるか不安	1
	技術に対する不安	1
【均整型】 n=7	児と親と関係形成ができるか不安	2
	看護師に対する不安	1
	子どもと接したことがない	1
	コミュニケーションそのものに対する不安	1
	子どもに対する不安	1
【凡庸型】 n=5	児と親と関係形成ができるか不安	1
	子どもと接したことがない	1
	児の親に対する不安	1
	技術に対する不安	1
	コミュニケーションそのものに対する不安	1
【消極型】 n=2	コミュニケーションそのものに対する不安	1
	児と親と関係形成ができるか不安	1

4. 患児とのコミュニケーションがよくできた理由・できなかった理由

コミュニケーションができた理由についての自由記載からカテゴリーの抽出を行った。その結果、35 のコード、6 のカテゴリーが抽出された。表 4 にコミュニケーション・スキルタイプ別に示した。【児の反応のよさ】【学生の関わりのよさ】は、どのタイプの看護大学生にもみられた。看護大学生の中で最も多いタイプの『受動型』の看護大学生から抽出されたカテゴリーは【時間の経過】、【教員の指導】や【親のサポート】が含まれていた。コミュニケーションができなかった理由についての自由記載からカテゴリーの抽出を行った。表 4 にコミュニケーション・スキルタイプ別に示した。10 のコード、2 のカテゴリーが抽出された。【コミュニケーションの戸惑い】や【児の反応がわからない】が、どのタイプの看護大学生にもみられた。

表4 実習後コミュニケーションができた理由とできなかった理由

	できた理由	件数	できなかった理由	件数
【受動型】 n=20	児の反応のよさ	7	児の反応がわからない	3
	学生の関わり方のよさ	6		
	時間の経過	1		
	教員の指導	1		
	子どもが好き	1		
	親のサポート	1		
【万能型】 n=8	児の反応のよさ	1	児の反応がわからない	1
	親のサポート	2		
	学生の関わり方のよさ	2		
	子どもが好き	1		
	時間の経過	1		
【均整型】 n=9	児の反応のよさ	1	コミュニケーションの戸惑い	1
	学生の関わり方のよさ	3	児の反応がわからない	2
	時間の経過	2		
【凡庸型】 n=4	学生の関わり方のよさ	1	児の反応がわからない	1
	児の反応のよさ	2		
【消極型】 n=2	学生の関わり方のよさ	1	コミュニケーションの戸惑い	1

5. 看護大学生が患児を受け持ったことで感じたこと

小児看護学実習が終了し、患児を受け持ったことに対して、看護大学生が感じたことについての自由記載の結果61のコード18のカテゴリーが抽出された。表5にコミュニケーション・スキルのタイプ別に示した。『万能型』の看護大学生からは、「言葉が話すことができない患児は、表情や検査データ等からアセスメントしないとイケないため大変だと思った。」「児は周りをよく見ている。見本となるような振る舞いをすべき。親との関わりがとても重要。すべての親が子供のことを大切に思っている。生き生きした姿に元気をもらえる。」など記載されていた。【関わり方やその難しさ】、【子どものアセスメントの重要性】、【遊びの看護】、【子どもの可愛らしさ】、【子どもへの思い】などが12抽出された。『万能型』とは反対の『消極型』の看護大学生からは「実習の日が経つと学生を児が受け入れてくれて嬉しい。患児が受け入れてくれ、早く退院してほしいと考えた。」「患児とのコミュニケーションは難しいが、看護師や教員の関わりから学べた。」など記載されていた。

表5 実習後患児を受け持ったことで感じたこと

	カテゴリー	件数
【受動型】 n=20	関わり方やその難しさ	6
	子どものアセスメントについて	2
	遊びの看護	2
	子どもの可愛らしさ	2
	子どもへの思い	2
	子どもの成長	1
	患児の受け入れ	1
	苦手意識の軽減	1
	親や子どもの思い	1
	実習の楽しさ	1
【万能型】 n=10	子どもから元気をもらう	1
	関わり方やその難しさ	1
	子どもの可愛らしさ	3
	子どもへの思い	2
	親や子どもの思い	3
	苦手意識の軽減	2
	患児のタイミングに合わせたケア	1
	子どもの命の選択	1
	親との関わり	1
	子どもから元気をもらう	1
【均整型】 n=11	子どものアセスメントについて	1
	遊びの看護	1
	家族へのサポート	1
	発達段階別の関わり	2
	子どもの可愛らしさ	2
	患児の受け入れ	1
	親との関わり	1
	子どもから元気をもらう	1
	症状の展開が早い	1
	子どもへの思い	1
【凡庸型】 n=7	母子の関係性	1
	関わり方やその難しさ	1
	関わり方やその難しさ	2
	子どもの可愛らしさ	2
	症状の展開が早い	1
【消極型】 n=2	子どもへの思い	1
	親や子どもの思い	1
	患児の受け入れ	1
	関わり方やその難しさ	1

IV. 考察

1. 研究対象者の背景について

兄弟がいる看護大学生は6割以上という結果であったが、近年は少子化、核家族化による影響で子どもと関わる機会は、少なくなっている。本研究の結果においても、“子どもと接触する機会が毎日または時々”は2割であり、子どもとの経験が少ないと考える看護大学生は、子どもとの関わりに苦手意識を感じていることが分かった。先行研究では、小児看護学実習における学生の困難感に“子どもとの体験の少なさへの戸惑い”が挙げられている³⁾。よって看護大学生にとって子どもと関わる時間を持つことは、子どもへの苦手意識を緩和できると考える。

2. 看護大学生に多い『受動型』について

看護大学生のコミュニケーション・スキルのタイプで最も多かった『受動型』は、一般の大学生(藤本・大坊, 2007)より2倍以上となっており、A看護大学における特徴である。

『受動型』はコミュニケーション・スキルの下位尺度である「他者受容」が高く、相手の意見や立場に共感することが得意である。また、コミュニケーション・スキルの下位尺度の「表現力」や「自己主張」が低いため、自分の考えを言葉でうまく表現できない。文献によると『受動型』は、自分の主張について論理的に筋道を立てて説明することも苦手である⁷⁾。看護大学生は、教員の指導や親のサポートを受けながらコミュニケーションが取れた場合、会話を持つことで満足せずに、なぜ、コミュニケーションがうまくいったのか考え、自身の行動を振り返れるようにすることが課題である。そのため、自身の行動がどうであったか意味づけしていくことが大事である。教員は効果的な発問をして看護大学生に考えさせるよう促す必要がある。看護大学生が自主的に自己の成長に繋がる課題意識を持つ必要がある。

3. 受け持ち前後の爽快感の変化と患児を受け持ったことで『万能型』の看護学生が感じたこと

気分調査票の爽快感の全体平均を見ると、爽快感は受け持ち前より受け持ち後の実習終了時に得点が増している。しかし、『万能型』では6人中5人の爽快感の得点が低下する結果であった。

爽快感の得点が低下した原因のひとつに考えられることについて、〈患児を受け持ったことで感じたこと〉から抽出されたカテゴリーをみると、『万能型』はカテゴリーの数が、その他のタイプよりも最も多く抽出された。『万能型』はその他のタイプより、多くの気づきがあったことになる。文献より『万能型』はコミュニケーション・スキルが高く、臨機応変に行動できると述べており⁴⁾、『万能型』の看護大学生は、患児や家族とコミュニケーションから多くの気づきや考えがあることがわかる。さらに、『万能型』は、表現力も高く、言葉として多くを表現することができる。その気づきや考えから発展的にアセスメントし、目の前の患児や家族の課題、更に自分自身の課題を捉えることができる。その結果、問題意識が持てることで爽快感が実習前より低下したと考える。『万能型』の看護大学生が、実習によって感じた自由記載は、【関わり方やその難しさ】、【子どものアセスメントの重要性】、【遊びの看護】、【子どもの可愛らしさ】、【子どもへの思い】など、対象のアセスメントや親との関わりについて課題意識を持っていた。『万能型』以外のスキルタイプを示す看護大学生で、課題意識に気付いた者は【爽快感】の得点が低下していた。坂野は爽快感の因子を「心静かな気分だ」「頭の中がすっきりしている」「物事を楽にやることができている」などとしている¹⁰⁾。自由記載から読み取れる課題は、“発達段階を考えた小児とのコミュニケーション”や“母親との関わり方”であり、問題意識が明確になっており、爽快感が低下したと考える。課題を持つことは、学習者としての成長を促すきっかけとなり、爽快感が低下したからといってマイナスではない。しかし、ネガティブな気持ちのままに実習を続けることは患児にも良い影響があるとはいえず、また次の実習先でのモチベーションの低下を助長する可能性があると考えられる。

4. 『消極型』の看護大学生について

自己主張が低い『消極型』の看護大学生が患児を受け持ったことで感じた自由記載の内容として、実習中の現象を“嬉しい”や“難しい”などといった感想としてのみ捉えている。なぜ、患児とのコミュニケーションは難しいのか、看護師、

教員の患児への関わりはなぜよかったのか、考察することができず、短絡的に捉える傾向であった。

5. 看護基礎教育への示唆

コミュニケーションの機会があると答えた看護大学生がコミュニケーションを得意だと答える傾向にあり、逆にコミュニケーションの機会がないと答えた看護大学生はコミュニケーションが苦手と感じていた。そのことから、子どもとの関わりが増えることは苦手意識が軽減すると推測される。そのため、教員は実習期間中の看護大学生の患児への関わる時間を増やすことができるような調整が必要であると示唆された。

しかし、病室で長時間、患児や家族と語っても、看護大学生がコミュニケーションの場面で感じたことを意味付けすることができず、患児や家族の反応の本質が分からないままになっている可能性があることが推測できる。『万能型』の看護大学生の爽快感の得点が下がったことや〈患児を受け持ったことで感じたこと〉の内容を考えると患児や家族の反応を捉えていないという懸念があると推測される。これらのことから、実習に関わる教員は、看護大学生が感じたことを言葉で表現する機会を作り、意味づけを導く必要があると考える。先行研究の看護基礎教育学習者のリフレクションに関する文献レビューから臨地実習における看護大学生のリフレクションは、自己理解、自己の課題発見、看護に対する意味づけ、自己肯定感の向上などの効果がみられたと述べられていた⁵⁾。文献や本研究の結果からも実習で感じた場面を丁寧に振り返りリフレクションする必要があると考える。

コミュニケーションが出来なかったと感じている看護大学生のコミュニケーションが出来なかった理由として、どのタイプの看護大学生からも“児の反応が分からない”が挙がっていた。実際は患児や家族と関わる時間を持っている、持っていないで看護学生を見るのではなく、児の反応がわかるか、分からないかで看護大学生の実習の効果をみることが重要であり、指導をする上で確認すべきことであると考え。コミュニケーション・スキルが高い『万能型』であっても言葉の表現力が乏しい小児とのコミュニケーションが難しいと感じ

ていると考えられる。

看護大学生は“児の反応”を正確に捉えることが重要であり、そのためには教員が看護大学生と実習の場면을共有し、その場면을教材にして、看護大学生の感じたことを具体化するよう促すことである。どのタイプの看護大学生においても“児の反応”を捉え、反応の意味を振り返り、理解していけるようにする必要がある。

コミュニケーション・スキルのタイプ別に看護大学生をみることで指導の示唆を得ることができた。学生には、その背景から様々なコミュニケーション・スキルのタイプがあり、教員はそのタイプを踏まえて教育に還元すると、更に実習における学修効果が高まることが期待できる。

文献には自らのスキルを自分らしさ、すなわち個性として受け入れた上で、自分を活かしたコミュニケーションを行い、自分にあった筋道でスキルを育てていけばよい⁷⁾と述べている。“自分に合ったコミュニケーション”を看護大学生が理解していくことで小児に対しても効果的なコミュニケーション能力が付いてくると考える。

一つ一つの場面をそのままにせず、常に振り返り解釈していくことが経験として残り、看護の幅を広げると考える。

V. 研究の限界と課題

研究の限界として様々な受け持ち患児がいるため、受け持ち患児や家族の状況で看護大学生の困難や気分は常に変化する可能性がある。しかし、看護大学生が現在持っているコミュニケーション・スキルを活かし、個々の看護大学生にあったコミュニケーションを導けるように指導していくことが今後の課題である。受動系の看護大学生が多いという特徴から、在学中に能動系のスキルトレーニングを行うことが効果的なコミュニケーション向上に繋がると考える。

VI. 結論

1. 看護大学生のコミュニケーション・スキルのタイプ別は、『受動型』24名(52.17%)、『均整型』10名(21.74%)、『万能型』6名(13.04%)、『凡庸型』4名(8.70%)、『消極型』

2名(4.35%)であり、『能動型』『回避型』『我執型』が該当する者はいなかった。

2. 気分調査表の結果、『緊張と興奮』と『不安感』は、患児を受け持つ前の得点より、受け持った後の方が低下した。
3. コミュニケーション・スキルが最も高い『万能型』である看護大学生は実習後の気分である【爽快感】の得点が低下しているものは、6名中5名であった。理由として『万能型』である看護大学生は患児や家族との関わりのなかで、小児看護の難しさを感じていることが示唆された。

VIII 引用・参考文献

- 1) 小代仁美 (2015)：看護学生の「子どもとの関係」の概念分析 日本小児看護学会誌、24 (1)、39-46.
- 2) 小代仁美、榎木野裕美 (2010)：小児看護学実習において看護学生が子どもに関わることを躊躇させる影響要因 日本看護研究学会雑誌、33 (2)、69-76.
- 3) 西田みゆき、北島靖子 (2003)：小児看護学実習における学生の困難感 順天堂医療短期大学紀要、14、44-52.
- 4) 畠知華子、林田りか：小児の検査・処置・治療に関わる看護師の困難感（気分）とコミュニケーション・スキルとの関連、日本小児看護学会第27回学術集会 講演集 p 111, 2017.
- 5) 阿部智美：患者とのコミュニケーション困難場面における看護学生の「解読、問題解決、感情」との関連、日本看護研究学会雑誌、36 (1)、149-156, 2013.
- 6) 藤本学 (2013) コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けたENCOREモデルの実習的・概念的検討 パーソナリティ研究、22 (2)、156-167.
- 7) 大坊郁夫 (2012)：幸福を目指す対人社会心理学～対人コミュニケーションと対人関係の化学～ ナカニシヤ出版
- 8) 日下菜摘、池田智子 (2016)：看護基礎教育学習者のリフレクションに関する文献レビュー 日本医学看護学教育学会誌、25 (1)、8-14.
- 9) 門谷あゆみ、野村理恵、信太照美 (2010)：小児看護学実習における看護学生の実習満足感に結びつく体験 フォーカスグループインタビューにより得られた看護学生の言葉から日本看護学会論文集 小児看護、41、64-67.
- 10) 坂野雄二、福井知美、熊野宏昭、堀江はるみ、川原健資、山本晴義、野村忍、末松弘行 (1994)：新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討 心身医、34 (8)、630-636.
- 11) 矢田フミエ (2017)：看護学生のリフレクションを成立させるための教員の発問の検討 第47回日本看護学会論文集 看護教育、71-74.

VII 利益相反

開示すべき利益相反はない。

謝辞

本研究にご協力頂いた立命館大学 教育開発推進機構 藤本学先生、A大学看護学部3年次生に深謝致します。

本研究は2015年度「活水女子大学看護学部共同研究費」を受けて実施した。

Changes based on communication skills of nursing students in their mood towards child patients

— Consideration about the relation to a taking charge of affected nursing students in consideration of a communication type —

Abstract

The purpose of this research is to clarify the relationship between the communication skill type of nursing college students and the state of mood before and after taking care of child patient in pediatric nursing practical training. We investigated the actual situation by the questionnaire survey to 67 third graders of A-nursing University, and data was collected from 46 subjects (recovery rate 68.7%). Using the ENDCOREs scale of communication skills, we divided the communication skills of University A nursing college student (hereinafter referred to as "nursing college student") by type. There were 24 passive-types (52.17%), 10 balanced-type (21.74%), 6 universal-type (13.04%), 4 mediocre-type (8.70%), and negative-type (4.35%) students. There were no active-type, avoidance-type, selfish-type correspondents, and there were many highly skilled students. Especially, passive-types were many in number, which suggests a tendency of nursing college students aiming to become nurses. As for the feeling of exhilaration after the completion of the practical training, the score increased as a whole ($P = 0.030$), but when we looked at the scores of each of the five students of the six universal-types in particular, the score for exhilaration went down. From this result, we guessed two points of follow the students of universal type felt difficulty of pediatric nursing, and it turns out that feeling of exhilaration tends to decline after practical training. For the problem of the students of universal type, I grow an opportunity to express what the students of universal type felt by words and think that there is the need to lead implication.

Key words : nursing college student, communication skills, clinical practice, child, mood